

イノベーションってなに？ 本当に必要？ ～経済史・経営史からみるこれからの“働き方”～



山口翔太郎氏

（一橋大学商学研究科博士後期課程）

【プロフィール】

1991年愛知県名古屋市生まれ。一橋大学商学部卒、2016年より同大学院商学研究科/イノベーション研究センター博士後期課程在学中。

学部時代はお笑い・投資・映画サークル、東北復興支援ボランティア、ソーシャルビジネスの学生団体など、多様な活動に取り組む。

学部3年でイノベーション研究のゼミに入ったことをきっかけに、社会科学の世界に興味を持つ。主な研究テーマは、研究開発人材の雇用システムとイノベーションの関係/事業の粘着性と企業の収益性/オープンイノベーションの実証分析など。2016年より文部科学省推進、SciREX「政策のための科学」事業の一橋大学拠点「IMPP」にも参画。

【担当スタッフより】

突然ですが、みなさん最近様々なところで『イノベーション』ということばを耳にしませんか？イノベーションを起こすことで何かが変わる、変えられる。そのような魅力的なことばとして使われる一方で、何をイノベーションと呼ぶのか、本当に必要なのかと問われるとなかなか答えるのが難しいのではないのでしょうか。

今回はこのような疑問について経済史、経営史、そして労働システムの視点から紐解いてくださるのが、一橋大学商学研究科博士後期課程の山口翔太郎さんです。

『イノベーション』そして『労働システム』を様々な角度から考えることで見えてくるものとは何なののでしょうか…。ぜひ今回の講演を通してじぶん自身の将来の働き方を考えるきっかけにもしてみてくださいね！